Osaka University Knowledge Archive

Title	「強き強者」と「弱き強者」 : ミルトンの二つの人間像
Author(s)	鈴木, 繁夫
Citation	Osaka Literary Review. 1981, 20, p. 97-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25574
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

「強き強者」と「弱き強者」

——ミルトンの二つの人間像——

鈴　木　繁　夫

ミルトンが完全に両眼を失明した当初，失明に関して少なくとも三つのソネットが書かれている。なかでもソネット19番と22番とは失明の捉え方がきわめて対照的である。

まずソネット22番からみていこう。

Cyriack, this three year's day these eyes, though clear
　To outward view of blemish or of spot,
　Bereft of light thir seeing have forgot;
　Nor to thir idle orbs doth sight appear
Of Sun or Moon or Star throughout the year
　Or man or woman.　Yet I argue not
　Against heav'n's hand or will, nor bate a jot
　Of heart or hope; but still bear up and steer
Right onward.　What supports me, dost thou ask?
　The conscience, Friend, to have lost them overplied
　In liberty's defense, my noble task,
Of which all Europe talks from side to side.
　This though might lead me through the world's vain mask
　Content though blind, had I no better guide.　　(1655)

セステットでは "thir seeing have forgot" や "thir idle orbs"[1] という言葉からわかるように，失明が半ばユーモラスに受け取られている。そうした態度を取れる理由がオクターブで明確にされる。第一の理由は自らが偉業をなしたという自負心が持てるからである。第二の理由はその偉業が大きくふくらんでいく希望が持てるからである。自負心と希望とから生ずる心のささえによって過去への回顧から未来への展望，それも "but still

bear up and steer / Right onward" という言葉からわかるように力強い進行への展望が開けている。その展望は，神は他でもない自分を選び使われ，偉業をなさしめたという自覚から生れている。この自覚がしっかりとしているだけに，見返りとしての失明という代償はさしたるものにすぎぬという評価になる。

それに対してソネット19番では失明そのものが不合理と考えられている。

When I consider how my light is spent,
　Ere half my days, in this dark world and wide,
　And that one Talent which is death to hide,
　Lodg'd with me useless, though my Soul more bent
To serve therewith my Maker, and present
　My true account, lest he returning chide;
　"Doth God exact day-labour, light denied,"
　I fondly ask; But patience to prevent
That murmur, soon replies, "God doth not need
　Either man's work or his own gifts; who best
　Bear his mild yoke, they serve him best; his State
Is Kingly. Thousands at his bidding speed
　And post o'er Land and Ocean without rest:
　They also serve who only stand and wait."　(1655?)

この世は暗く茫漠とした世界であり筆者が文才を発揮する余地は充分にある。そして筆者自身は「聖書」の邪悪な召使いのように自らの才能をこのまま埋めようと思わない。にもかかわらず埋めよと促すかのように失明がふりかかる。このようにセステットで失明の不合理を明確にし，その直後でその不合理を問う。しかし "fondly" と知りながら問う以上，問う方向は自分自身の軌跡に向かう。そしてこの問いは過去の所業の問直しにとどまらず，納得のいく答を持っている。9行目から12行目にかけて神に仕える際に自発的であるか否かが重要とされる。そして12行目から14行目にかけて，自発的に仕える仕え方が二通り示される。このことから "Talent" を可視的，現実的に使っていなくとも，自発的に神の御意志に従って "stand

and wait" ことは神の目からは "Talent" を使い増していると判断する。

冒頭でこの二つのソネットは対照的と述べた理由がはっきりしたと思う。22番では失明をささいな出来事として，過去の行為の肯定に基き，現在の意識から未来へと敷衍して自らの生き方が述べられている。これに対して19番では，失明に不合理を感じて過去の行為を問直して，現在から未来への生き方が述べられている。つまり二つのソネットを較べてみると，22番で肯定され19番で問直されている人間像がある。また22番で考えられておらず19番で提示されている新たな人間像がある。換言するなら失明を契機に従来までの人間像と新しい人間像とがある。

本稿の目的はこの二つの人間像をあきらかにすることである。しかし人間像全般に渡り論ずることはほぼ不可能に近い。だから人間像といっても，人間の行動の源泉，舵ともなる精神の中核と人間の行動の型とに絞って論ずることにする。しかしこの二つの要素の解明は後者にはるかに比重がかかる。なぜなら精神の中核については一応の定説が既にあり，私自身それに賛成しているからである。にもかかわらず精神の中核を取り上げるのは，私なりのはっきりした検証法があるからである。

2

1652年初め頃，両眼を失明するが，この時までに手がけたトラクトは13に及び，政治，教会，家庭の自由をめざすものである。内容はこのように多岐に渡るが，そのなかで人間について繰返し言われることがある。

人間には悟性と意志とが備わっており，それ自身は白紙で偏見もかたよりも全くない。ところがこれらは往往にして教育や愚鈍，とりわけ慣習に支配され，人間は悪い方向に傾いてしまう。それに対して人間の本来の姿とは理性によって悟性と意志とが支配され，その結果外的に自由となり，内的に美徳を体現する姿である。

If men within themselves would be govern'd by reason, and not generally give up thir understanding to a double tyrannie, of Custom

from without, and blind affections within, they would discerne better, what it is to favour and uphold the Tyrant of a Nation.... Tyrants are not oft offended, nor stand much in doubt of bad men, as being all naturally servile; but in whom vertue and true worth most is eminent, them they feare in earnest, as by right thir Maisters.[2)]

さらに，そうした人間は自己の理性をよりどころにし生き抜いていく。それは悪の誘惑的本質をみきわめ，理性に従って進んで善を選べる美徳を持った人間である。

God uses not to captivate under a perpetuall childhood of prescription, but trusts him with the gift of reason to be his own chooser... What wisdome can there be to choose, what continence to forbeare without the knowledge of evill? He that can apprehend and consider vice with all her baits and seeming pleasures, and yet abstain, and yet distinguish, and yet prefer that which is truly better, he is the true warfaring Christian. [3)]

つまり理性が神から授けられ，理性に人間が従って行動することを神が人間にはかられたと考えている。さらに人間が理性に従って生きることが，徳を行い徳ある人間になることと同一視されている。だから人間の倫理観や価値観を規定し，かつそうしたものの深層にあるのが理性[4)]なのである。精神の中核とは理性に支配され従うことなのである。

理性に裏打ちされて行動し，徳を待つ人間の典型がソネット15番に現われる。

Fairfax, whose name in arms through Europe rings,
  Filling each mouth with envy or with praise,
  And all her jealous monarchs with amaze
  And rumors loud, that daunt remotest kings,
Thy firm unshaken virtue ever brings
  Victory Home, though new rebellions raise
  Thir Hydra heads, and the false North displays
  Her brok'n league, to imp their serpent wings.

O yet a nobler task awaits thy hand;
For what can War, but endless war still breed,
Till Truth and Right from Violence be freed,
And Public Faith clear'd from the shameful brand
Of Public Fraud. In vain doth Valor bleed
While Avarice and Rapine share the land. (1648)

背景には1648年に王党派の残党が巻き返しをはかったが，その反乱軍を最高司令官のフェアファックスが鎮圧するという事件がある。このソネットは1行－4行，5行－8行，9行－14行の三層構造になっていると考えられる。[5] そしてこのソネット全体の要となっている言葉が5行目の“virtue”である。第一層でフェアファックスの武の名声がヨーロッパ全土に響き渡っていることがあきらかにされる。それに続いて“virtue”という言葉が現われるので“virtue”はフェアファックスの武力そのものをさすことがわかる。そして，7行目で“virtue”は反乱という怪物ヒュードラを倒す程の力を持っていることがわかる。言うまでもないが，ヒュードラはハーキュリーズによって倒された怪物である。だから第二層では，反乱がヒュードラに喩えられることによりフェアファックスが間接的にハーキュリーズに喩えられている。そしてハーキュリーズは当時の神話学では様々な悪徳に打ち勝つ，美徳を備えたよきキリスト教徒の象徴と考えられていた。[6] だから，“virtue”とは武の力だけではなく，倫理上の美徳という意味でもあるとわかる。つまり第2層では，第1層との関連と第2層それ自体のふくらみで“virtue”に二つの意味を持たせている。そして後者の意味，つまり倫理上の美徳を発揮することが第3層で提言される。国内は武力という“virtue”でひとまず治まった。今度は美徳という“virtue”で国内が倫理上治まるようにと願っている。

ここで注意しなくてはならぬのは，この詩の背後で動いている論理は，武力という物理的力と倫理という霊的力とが同一視されていることである。つまり徳即ち力なのである。だから理性に裏打ちされた人間とは，自ら内に持つ徳が肉の力に実際になるので，倫理の世界でも現実の世界でも歴戦

の勇士なのである。トートロジカルな言い方であるが，強き強者なのである。[7]

3

失明以前の古い人間像の精神の中核は理性に支配され従うことであり，また，そのあり方は強き強者であることがわかった。ここで我々の関心はソネット19番で提示されている新しい人間像へと向う。

当時の人々が当然と考え，ミルトン自身も一度は認めなくてはならなかったことは，失明とは神が罪深き人に下す罰だという考え方である。[8] ソネット19番とほぼ同じ頃に書かれた「第2弁護論」のなかでミルトンはこの考え方に異を唱える。そしてその後で，自分は失明せずに生き続けることもできたが，あえて失明したのだと述べる。

> I seemed to hear, not the voice of the doctor. . . , but the sound of a certain more divine monitor within. [9]

遺憾な政治状況をなおざりにして，医師の忠告通り筆を執らぬか，心の戒告者に従って筆を執るかの二者択一を迫られた。そして結局失明すると知りつつ戒告者に従って筆を執った。

戒告者とは前節との関連で理性ととれそうである。つまり理性の命ずるままにあえて執筆に踏み切ったと考えられそうだ。しかしこの推測は半分正しいだけで，戒告者の内容をぴったりと言い当てていない。というのも失明後およそ7年して書かれた「世俗権力」に次のような一節がある。

> Whence I here mean by conscience or religion, that full perswasion whereby we are assur'd that our beleef and practise, . . . , is according to the will of God & his Holy Spirit within us, which we ought to follow much rather then any law of man, as not only his word every where bids us, but the very dictate of reason tells us. [10]

ここでいう説得という言葉はこのトラクトのなかで「心の中のキリストの精神」[11] あるいは「キリストの御霊による内なる説得的気持」[12] と言

い換えられている。このことからもわかるように，説得とは人の心に生じ，内側から人を一定の方向に動かす神の招きの力である。

ここで注意すべき二つのことがある。一つは説得が理性を抱摂している点である。確かに説得は「自然の光」[13] や「理性の光」[14] を越えていて理性的に把捉できない。にもかかわらず説得に従うことは，引用の最後にあるように理性が命ずることであって，理性にかなうと考えられている。第二に，“we ought to follow” とあるように説得に人間の悟性や意志が押し流されてしまうのではなく，説得に積極的に進んで従っていく，人間の側からの自発性が要求されている点である。この二つの点は，失明以前のように理性に支配されて従うことのみを持って精神の中核とはもはや考えられていないことを示している。と同時に戒告者とは理性だけに限定できず，むしろ理性を抱摂する説得，つまり聖霊と神の御意志とが人間に直接働きかける力であることをあかしている。だから失明を被って精神の中核は理性から説得へと屈折していったのだ。

ここで問題になるのは，説得に支配され従う人間の行動の型がどのようなものであるかである。先に引用した「第2弁護論」の部分に続いて，現在失明を被ることが不幸でない裏付けを述べている。

> What is true and essential in them [things] is not lost to my intellectual vision. [15]

可視的に物は見えずとも，物に備わる実体は見失なっていない。いや可視的に見えぬからこそ物がみえて来るのだ。そうした失明の事態を普遍化して

> There is a certain road which leads through weakness, as the apostle teaches, to the greatest strength. May I be entirely helpless, provided that in my weakness there may arise all the more powerfully this immortal and more perfect strength. [16]

と述べられる。肉の弱さを通じての霊の強さという逆接の主張となる。

ここで注意しなくてはならぬのは，第一にこの逆接的人間像はミルトン

の独創ではない点である。この逆接はコリント書やヘブル書[17]にみられる考え方である。第二にこの逆接は独創ではないと同時に，失明を被ったため都合よろしくいきなり思いついた逆接でもない。例えば失明を被るおよそ13年前に書かれた「教会統治の理由」では，政教分離を主張する際の大きな原理は霊の強さと考えられている。そして小さな原理として肉において弱きことにより霊の強さが生れることが引合に出されている。[18] また失明直前，友人の訪問日誌にはこの逆接をあきらかに意識して書かれた署名がある。[19]

つまり新しい人間像とは二重の意味で古いものである。にもかかわらずこのいわば弱き強者ともいうべき人間像は新しいといえる。それは失明以後の作品[20]に特徴的に現われ，しかもアダム，キリスト，サムソンという三大作の主人公達の本質的な人間像であるからだ。つまり弱き強者という型は，強き強者という人間像を越えている点でも，観念としての人間像を脱皮し作品に化肉化した人間像である点でも新しい人間像なのだ。

『失楽園』でアダムは「子孫なる男達に比して，善良この上なき男」[21]と描かれている。しかも造られた時に理性を授けられているために，アダムはこの世の被造物を治める王者である。そしてアダムは理性に支配され従うことが行動規範なのである[22]から，前述した古い人間像の精神の中核とぴったり一致する。しかしアダムの行動は強き強者の型ではない。そのことはイーブの堕落を聞き，それに対拠するアダムの行動に現われている。

アダムはイーブとの間に働く磁力のような力ばかりか，人格愛にひかれてイーブと運命をともにしようと決断する。つまりアダムはそうした人間感情を何よりも優先させて神への不従順を犯す。アダムは神を信ずる点では限界があり，広義の肉においても霊においても弱い者である。

とはいえ理性に裏打ちされた人間が実は弱い存在であるといって，従来の人間像を否定することだけにとどまっているのではない。『失楽園』には新しい人間像が提示されている。アダムとイーブとは自分達の末裔が肉において強きサタンを破るという「女の種（すえ）」の約束を信じて生き続けるこ

とを確認しあう。そして悔い改めて神の怒を静めようとする。その悔い改めは，アダムとイーブとが理性に照らして自発的に行なったようでも，実は二人に働きかけた神による促しに自発的に従ったのだ。[23] ここで理性を抱摂する説得が人間を本質的にささえる精神の中核になってきているのがわかる。

二人の祈りが聞き入れられ，ミカエルが二人のもとに送られる。ミカエルはアダムに救済史を見せまた語るが，その過程でアダムは霊において強き者となっていく。そしてついには

by things deem'd weak
Subverting worldly strong. (XII, 567-8)

という逆接を認識するに至る。そして摂理を導き手として，住み慣れた楽園を離れてこの世に出ていける程霊において強き人間とアダムはなる。つまり『失楽園」の最後で，肉においては脆いが霊においては強いアダムがこの世に出立していく。

こうして『失楽園』には古い人間像の失墜と新たな人間像の提示とがある。そして後者が前者の人間像を凌駕している。また作品それ自体は新旧二つの人間像のかけ橋となっている。この新たな人間が楽園を離れて逆の型の人間像と対決するのが『復楽園』においてみられる。

イエスは神が促す説得に従って荒野に誘われていく。[24] 荒野に行く目的ははっきりしていなくとも，行けというのが神の促しであり，それがはっきりしているからこそ荒野に向う。イエスは説得を自らの心で感じ，それに自発的に従い，またそれに支配されている。イエスを背後からささえる精神の中核はこの説得だけでありそれ以外ではない。

荒野でイエスはサタンから様々な誘惑を受ける。誘惑の過程ではっきりすることは二つある。一つはイエススは新しい人間像を具現していることである。もう一つはその人間像の正しさである。サタンが持つ「富，名誉，兵器，芸術」[25] といった肉の力をイエススは全く持っていない。事実サタンはイエススに向かってそのことを強調する。[26] そしてサタンは

肉の力がこの世を治めているのだから，肉の力がなければこの世を治められないはずだという。それに対してイエススは，肉の力が治められるのは人間の外面，肉体だけであって魂まで及ばない。人を支配し治めるとは内なる人間である魂を治めることである。魂を治めるためには，神の御意志に従う為に必要な徳がありさえすればよい。また肉の力はそうした徳をなまくらなものにするから必要でない。サタンが一貫して肉の強さを主張し，イエススにそれを認めさせ，自分の論理に引込もうとする。それに対してイエススは肉の強さは無価値で，むしろ邪悪なものとして退けていく。それを裏付けるかのように，サタンのさし出すいくつもの肉の力への誘惑にイエスス自身は肉の力がなく弱い者でありながら，次々と打ち勝てる。いやむしろ，肉の力に弱いからこそ霊の力において強く，サタンの持つ肉の力に打ち勝てる。そのことは第一巻で神が要約してガブリエルにこう語っている。

His weakness shall o'ercome Satanic strength
And all the world, and mass of sinful flesh.　(I. 161-2)

つまり『復楽園』はその初めから，肉の力に弱くとも霊の力が強いから，肉の強さに打ち勝てるという逆接性を持っている。そしてイエススは弱き強者の体具者なのである。さらにイエススが肉の強さを持つサタンに打ち勝つことでその逆接性の正しいこともあかしている。

この新しい人間像が荒野を抜けてこの現実の世界で，弱き強者の逆接性の正しさを具体的に示すのが『闘技士サムソン』である。『復楽園』では弱き強者の正しさが逆の型との戦いのなかであかされるが，『闘技士サムソン』ではその正しさが，この世の現実の力との戦いのなかであかされていく。

サムソンはかつては比類なき程の肉の力に恵れて異教徒を次々と倒して来た。しかし現在は異教徒の奴隷であり，それに加えて盲目でもあって，肉においてはこの上なく弱き者である。現在の状態に陥った理由は，強き力を持ちながらも心に弱さがあったからに他ならない。[27]

ところで現在のサムソンを苦しめる大きな不安は，過失を犯した自分が神により定められたイスラエルの解放という聖なる使命をもはや果せぬのではということである。ところが劇の進行とともに過失を犯した自分自身を責める度合と同じ程激しく神への信頼が高まっていく。[28] そしてその信頼が頂点に達したとみえる時，サムソンはダゴン祭の余興に出るようペリシテ人に命じられる。その命令に従うことは，律法上では罪を犯すに等しいことになるので，サムソンは命令を拒む。しかし突然，その命令に従うようにとの神からの説得をサムソンは感ずる。[29] そして何の疑いも抱かずにその説得に従って，一度は拒絶した命令に服する。もちろん説得の内容は，律法には反するのを充分に知りつつ従うのである。また何ら疑いを抱かぬのは，自暴自棄になっているからではなく，説得に従うことがこの場合自分に課せられた使命と確信するからである。そして自ら進んで説得に従うことで実際に異教徒を打ち破ることになる。

ここで二つのことがはっきりとわかる。一つはサムソンの行動を最終的に支配するのは人間感情ではなく説得である。つまりサムソンの精神の中核は説得に他ならない。第二には肉において強いサムソンが肉において全く弱くなり，肉の力に徹底的に打ちのめされた時に霊の力が強くなる。それもきわめて不合理な内容を持つ説得に進んで従う程強くなる。その強き霊の力によって神に定められたこの世の使命を半ば初めて果せるようになる。サムソンの最期の姿がどんなに力強くみえようとも，肉において強いからではなく，霊において強いからそのように見えるのである。つまり，サムソンも弱き強者なのだ。そしてそれと同時に肉の強さではなく霊の強さを通じて敵に壊滅的打撃を初めて与えるサムソンは，弱き強者の逆接性の正しさをあかしている。

4

本稿の冒頭で新旧二つの人間像が失明を境にして生まれることをあきらかにした。失明以前の人間像とは理性に支配され従って生きる強き強者型

である。それに対して失明以後の人間像とはその古い人間像を凌駕するものである。理性を抱摂する説得に支配され従って生きる弱き強者という逆接的な型の人間である。この新しい人間像は堕落以後のアダム，肉の強き力を持つサタンと荒野で戦うキリスト，この世で現実の肉の力と戦うサムソンにはっきりと現われている。つまりこれらの主人公はいずれも弱き強者なのである。そしてこれらの主人公，とりわけキリストとサムソンとは強き強者の逆接性の正しさをあかしている。

注

1) ミルトンの詩の引用はすべて *John Milton: Complete Poems and Major Prose,* ed. Merritt Y. Hughes. (New York: The Odyssey Press, 1957) による。
2) *The Tenure of Kings and Magistrates* in *Complete Prose Works of John Milton,* Vol. III, Gen. ed., Merritt Y. Hughes (New Haven: Yale Univ. Press, 1962), 190. この版は以下『散文全集』と略記する。
3) 『散文全集』第2巻513-15ページ。
4) より正確には *recta ratio*「正しき理性」である。Robert Hoopes, *Right Reason in the English Renaissance* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1962), pp. 4-6. 参照。
5) 野呂有子「ミルトンの英雄観」（東京成徳短期大学紀要）第11号（1978）39ページ 参照。
6) Alexander Ross, *Mystagogus Poeticus or the Muses Interpreter* (1648;rpt. New York: Garland Publishing Inc., 1976), p. 168.
7) この人間像は「戦うキリスト者」という当時のトラクトに現われる人間像ときわめて類似している。William Haller, *The Rise of Puritanism* (Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press, 1938) pp. 150-172.
8) Isabel Rivers, "Milton's life and times: aids to study," in *John Milton: Introductions,* ed. John B. Broadbent (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1973), p. 59. 及び David Masson, *The Life of John Milton* (1859-1880; rpt. Gloucester: Peter Smith, 1965), IV, 530. 参照。
9) 『散文全集』第4巻 588ページ。
10) 『散文全集』第7巻（改訂版）242ページ。
11) 『散文全集』第7巻（改訂版）244ページ。
12) 『散文全集』第7巻（改訂版）261ページ。

13) 『散文全集』第７巻（改訂版）242ページ。
14) 『散文全集』第７巻（改訂版）242ページ。
15) 『散文全集』第４巻第１部 589ページ。
16) 『散文全集』第４巻第１部 589-590ページ。
17) 第２コリント書１の12及び12の９．ヘブル書11の34参照。
18) 『散文全集』第１巻 849-850ページ参照。
19) 『散文全集』第７巻 260ページ注18参照。
20) 例えば，『散文全集』第７巻（改訂版）258ページ及び456ページ参照。
21) 『失楽園』第４巻 323行。
22) 『失楽園』第８巻 590行，611行及び第９巻 351-352行参照。
23) 『失楽園』第11巻90-93行参照。
24) 『復楽園』第１巻 290-292行参照。
25) 『復楽園』第４巻 368行。
26) 『復楽園』第２巻 410-418行参照。
27) 『闘技士サムソン』52行，173-174行参照。
28) 『闘技士サムソン』1171-1173行参照。
29) 『闘技士サムソン』1381-1384行参照。